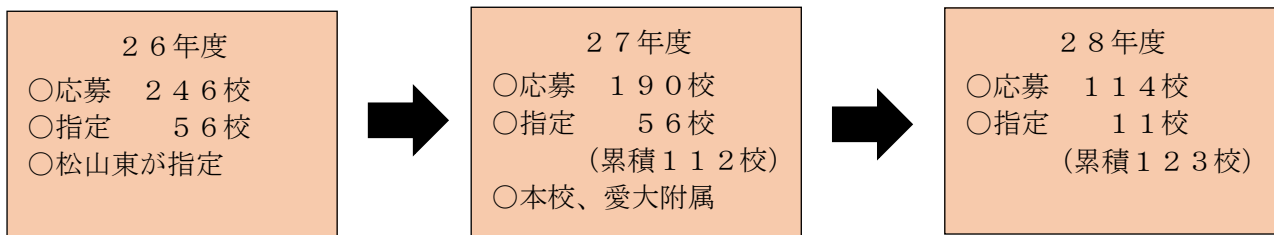


## 「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」事業について

標記事業については、平成26年度から開始されており、現在、全国の123校が指定を受け、教育課程（簡単にいえば時間割です）等の研究開発を行っているところです。本校も、「大学、企業、国際機関等と連携して、グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成に取り組む学校」として文科省の指定を受け、27年度から事業を開始しました。

全国から応募した学校は550校（延べ）におよび、倍率でいうと約4.5倍になります。有名な進学校が数多く不採用となるなかで、本校が指定を受けられたのは、遠藤前校長先生のリーダーシップの下、指定に全力を挙げて取り組んだ教職員の努力の賜であるとともに、120年間有為な人材を輩出してきた本校の歴史と教育実績が認められたものだと考えています。



これまで、保護者の皆様には本事業の目的や内容等について、十分な説明をすることができておらず、「事業に取り組む意味があまりないのではないか」「進学にはマイナスになるのではないか」と不安に思われている方もおられるとの話をお聞きました。口頭で直接ご説明することができればよいのですが、時間と機会もないと思われまますので、紙面を借りて説明させていただきます。

### 保護者の方の不安

- 多大な労力を傾注することになるが、その意味（見返り）はあるのだろうか。
- 授業の一部がSGHの取組となり、学力が低下し進学に不利になるのでは。

## 1 研究開発の概要等

### (1) 目的

文科省は、その目的を「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。」としています。

本校では、文科省の目的を踏まえ、次のような目標を設定しています。

- ア 研究を通して、**地域に対する理解や愛郷心を深める。**
- イ **グローバル社会で活躍できるコミュニケーション力を育成する。**
- ウ **地域の抱える課題を発見し、問題解決へ向けての行動力を持った生徒を育成する。**
- エ 大学と連携したアカデミックな研究を行うことで、学習意欲を高めるとともに、明確な目的を持って国内外の大学等へ進学する「**学びの即戦力**」となる生徒を育成する。

オ 地域と世界的な課題を双方向から考察し、問題解決に向け、自ら考え、判断して実践することができるグローバル・リーダーを育成する。

## (2) 本校が目指すグローバル・リーダー

本校の全ての生徒が世界に飛び出して行って活躍することはないと思います。国内で日本の産業を支える生徒もいるでしょうし、地域の活性化のために貢献する生徒も必要です。その全てが大切であり、それぞれの舞台上、先導役を果たしてくれる者がグローバル・リーダーであると考えています。

このような観点から、本校が目指すグローバル・リーダーを次のようにしています。

- 地球規模の問題の原因や構造の本質を見抜き、解決に取り組む人材
- グローバルな視点から地域の活性化に貢献できる人材
- 学習意欲が旺盛で、困難に挑戦し克服しようとする人材

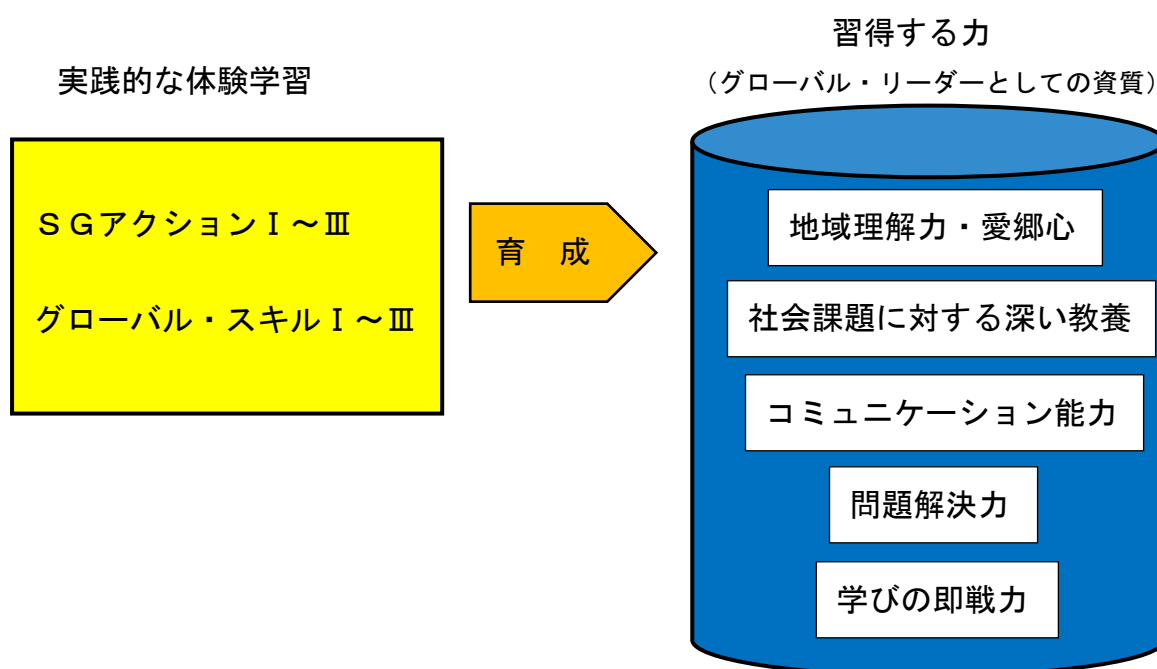
## (3) 研究主題

「宇和島のうみ・やまから世界を考える  
～Uwajima to the World :Global Thinking From A Local Perspective～」

## (4) 研究の概要

本校が設定した目標を達成するために、生徒は、

- 「SGアクション」(社会問題の調査・研究・探究活動を主とした学習)
- 「グローバル・スキル」(英語でのコミュニケーション能力、表現力の向上を目指した学習)に取り組みます。



## ア SGアクション

対 象	分 野	内 容	身に付けさせる力など
前期生	Basic	○「宇和島学」「世界学」 ○キャリアプランニング	・ 学びの土台となる地域理解と愛郷心
4・5年	I・II	○大学、企業等への訪問及び講演 ○国内フィールドワーク（長崎、島根県隠岐等） ○海外フィールドワーク（台湾、シンガポール、スリランカ、ハワイ等） ○課題研究 ○研究内容発表会	・ 社会的課題を発見する力・解決する力 ・ 実用的なコミュニケーション能力、プレゼンテーション力 ・ チャレンジ精神 ・ 世界に売り込む企画力・交渉力 ・ 相手の文化、価値観を理解する異文化理解力、共感力 ・ 論理的な思考力・判断力
6年	III	○課題探求レポート作成 ○課題解決の実践的取組を提案 ○文献や論文の研究	・ 解決策の提案 ・ 建設的に議論する力 ・ 独創性、先進性、使命感 ・ スーパーグローバル大学との連携

## イ グローバル・スキル

対 象	分 野	内 容	身に付けさせる力など
前期生	Basic	○グループ学習 ○英語でのインタビュー	・ 基礎的な英語コミュニケーション能力 ・ 基礎的な表現力
4・5年	I・II	○タスクベース型授業※1 ○クリル※2 ○GTEC（英語）	・ 英語プレゼンテーション力 ・ 英語学習に対する積極性 ・ 語学力・思考力の融合
6年	III	○スピーチコンテスト ○各種発表会	・ ディベート、ディスカッション ・ 英語でのレポート作成力 ・ 世界への情報発信力

※1 タスクベース型授業とは、全員にある課題（タスク）を与え、生徒は個人やグループで英語を使ってその課題を解決していくことにより、実践的な外国語運用能力を高めることを目的とした授業

※2 クリル（内容言語統合型学習）とは、各教科を日本語ではなく英語で学習することにより、英語活用力の向上及び各教科の学習スキルの向上を意図した学習

## ウ 研究例

SGアクションII・IIIでは、個人あるいはグループで、最も興味関心のあるテーマを設定し、課題研究を行います。

- 地元宇和島の農・水産物を世界の市場へ販売・展開する研究

- グローバルな視点で地域産業を活性化させる研究
- 人口減少を食い止める地域おこしの研究

## エ 連携する主な大学、企業、行政

- 大学  
国内・・・愛媛大学、松山大学経営学部、長崎大学水産学部  
海外・・・開南大学（台湾）、イエール大学（シンガポール）、ハワイ大学
- 企業  
愛育フィッシュ輸出促進共同体、四国IT協同組合、(株)キシモト
- 行政  
愛媛県愛のくに営業本部、愛媛県教育委員会、愛媛県農林水産研究所（水産研究センター、果樹研究センターなど）、宇和島市

## 2 事業に取り組むことで生徒が身に付ける力について

過去に、日本経団連が「選考時に重視する要素」について企業に調査した結果によれば、

- 1位 コミュニケーション能力（80.2%）
- 2位 主体性（62.1%）
- 3位 協調性（55.0%）
- 4位 チャレンジ精神（50.2%）
- 5位 誠実性（36.3%）

となっています。

専門的な知識や一般常識は、10位以内に入っていません。決して一定の知的な能力を持ってなくてかまわないということではなく、それを生かすことができなければ社会では通用しないということだと思えます。主体性を持って他者を説得し、多様な人々と協働して新しいことをゼロから創造し、社会の現場を先導する力を身に付けることが重要だとのメッセージだと考えます。

本校が行うSGH事業は、まさに社会が求める人材を育成するものであり、この事業に取り組んで身に付ける、「社会課題に対する関心と深い教養」「コミュニケーション能力」「問題解決力」等の能力は、子供達にとって一生の財産となるものです。

## 3 進学への影響（入試の種類と今後の動向）について

現在、大学入学者選抜方法には、主に一般入試、推薦入試、AO（アドミッション・オフィス）入試の3つがあり、それぞれ大きく変わろうとしています。

### (1) 一般入試

国公立大学では、入学定員の約85%が一般入試で選抜されています。しかしながら、現状の高等学校教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評されていないとの反省があります。そのため、国は「1点刻み」の入試から「多面的・総合的な評価」による大学入試へと転換するため、平成33年度大学入試（現在の中学2年生）から、大学入試センター試験を廃止して、論理的思考力などを見る「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を導入する方針としています。試験の方法や論理的思考力を問う問題がどのようなものになる

のか分かりませんが、公表された試作問題を見てみると、知識の暗記だけでは解答できず、高校としても指導方法を模索するなど対応する必要があります。現在の高校生は関係がないように思われますが、国公立大学等では新しい入試の目的を踏まえて、それよりも早く実質的な入試改革が始まるのではないかと考えています。

## (2) 推薦入試

東京大学、京都大学では、本年度入試から初めて推薦入試を導入しました。高校3年生になると、「受験科目の勉強だけに集中する」という高校生も少なくありません。しかし、これからの社会においては、“与えられた問いに正しく答えられる”能力だけではなく、“自ら深く考えて、主体的に行動できる”能力が求められます。両大学としては、推薦入試を行うことで、国内外から世界に通用する優秀な人材を集め、国際的な評価を高めたいという意図があると思いますが、高校側の立場からも生徒が受験勉強の中で身に付ける能力を変えていくことは重要だと考えます。

また、国立大学の集まりである国立大学協会は、「将来ビジョンに関するアクションプラン（中間まとめ）」の中に、推薦入試・AO入試などを入学定員の3割に拡大する方針を盛り込みました。アクションプランと共に公表された「工程表（たたき台）」では、推薦入試・AO入試などによる入学者を平成30年度までに「入学定員の30%を目標」に拡大すると示しています。平成26年度国立大学入学者のうち推薦入試入学者は14.8%（AO入試を含む）なので、現在の倍以上となります。このようになることを考慮すると、全ての高校において、論理的思考力や判断力などを重視した入試に対応する必要があります。

## (3) AO入試

AO入試は、あまり聞き慣れない方式だと思われそうですが、2000年頃から拡大してきたようです。AO入試では、エントリーシートなどによばれる受験生からの提出書類をもとに、面接を繰り返し実施し、じっくりと時間をかけて学生の意欲、適性を判断します。大学によってはさらに論文やプレゼンテーションなどを課し、受験生の適性・学習意欲などを総合的に評価します。従来の入試方式と比べると、「高い学習意欲」「学びへの明確な目的意識」が選抜基準として重んじられています。

## 4 終わりに

ここまで記しましたように、社会が求める人材を育成するため、大学入試の方法も大きく変わろうとしており、その流れは今から現れてくると思います。特に、入学定員の枠が増加してくる推薦入試やAO入試については、知識を暗記する勉強しかしていない生徒や、自分の可能性を表現できない生徒は受験しても合格することは難しいのが現状です。SGH事業に取り組んだ課題研究等は、自分の良さをアピールでき、大きなプラスとなります。もし、本事業に取り組むことが進学に不利になるのであれば、全国の名だたる進学校が本事業に応募することはないのではないのでしょうか。

また、現在の入試で求められている知識等についても、それがなければ思考することも、表現することも、判断することもできませんから非常に重要です。そのため、本校では、本事業の特例措置を活用して、入試科目の授業時数は減らさず、習得する知識はこれまで以上を目指し、習

得した知識を活用したり、応用して新しいことを発想したりする力を育成します。

一般の中学生は、高校入試という試練を経験することで学力が向上しますが、全国の中高一貫校は適性検査を含む入学者選考を実施すると、基本的に6年後の大学等の入試まで受験することはありません。そのため、本校では、3年生に対して確かな学力を育成することを目的に、9月と1月の2回、前期学力到達テストを実施しています。もちろん個人差はありますが、到達テストは本番ではないので、高校入試で向上する学力分を補うことは難しいように思います。「中だるみ」と表現されている、中高一貫校に共通する課題を解決するためにも、SGH事業は有効であると考えています。生徒は、最前線で活躍されている方の指導を校内外で受け、地域の課題を理解していきます。さらに、その解決に向けた研究を行うことで、生徒は本物の現場を知ることになり、社会に貢献しようとする態度や主体的に学習しようとする意欲を高めます。このような経験を積み重ねることで学力を向上させるとともに、グローバル社会で活躍する人材が育成されます。

保護者の皆様におかれましては、御自身が経験されたことでなく、不安を持たれている方もおられると思いますが、本校が取り組むSGH事業につきまして、御理解、御協力をお願いいたします。

なお、このことについて、御質問、御意見等がありましたら、御説明させていただきますので、遠慮なく申し出てください。